

■公益信託タカラ・ハーモニストファンド 2025年度（第40回）助成先

	助成先 代表者名	助成額 活動地域	テーマ 活動・研究の内容、目的、助成金の用途等
活動の部	NPO法人本州産クマゲラ研究会 藤井 忠志	50万円 秋田県 岩手県	絶滅に瀕する本州産クマゲラ個体群の生息・生態調査および展覧会「クマゲラの世界展」開催 北東北には、津軽海峡を境に北海道の個体群と遺伝的にも交流のないクマゲラ個体群が、わずかながらブナの森で生息している。しかし、現在の推定個体数は北海道産300に対し本州産は100個体を下回り、今や種の維持が困難な状況にある。当会の調査では2017年以降、個体確認ができていない現状にあり、絶滅が危惧される。そのため、2024年1月17日に環境省・林野庁・文化庁に保全のための要望書を直接、提言・提出したところである。今年度も半世紀に亘り継続してきた調査研究を実行すると共に、並行して『クマゲラの世界展』をA1オリジナル写真パネル120枚や解説パネルで公開し、一般への教育普及・啓蒙の一環とする。
	渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会 高松 健比古	45.1万円 栃木県	渡良瀬遊水池湿地再生みらいプロジェクト(どろんこ庭づくり) ラムサール条約湿地登録を契機に国土交通省が掘削による湿地再生を進めている。水辺が増え、湿生植物や絶滅危惧種が芽生え、再生はある面で成功している。しかし、掘削後の遷移に対する方策はとられておらず、再生した湿地は遷移によりヤナギ林と化している。消失した絶滅危惧種もあり、種多様性が低下している。そこで、遷移をリセットして湿地を維持する方策として「どろんこ庭づくり」を実施している。「どろんこ庭づくり」では、ヤナギを除去して明るい環境に戻し、土壌を人為的に攪乱して埋土種子等の芽生えを促進する。昨年度ヤナギの除去とトラクターによる耕起を試したところ、結果は良好だった。今年度は本格実施を計画している。
	特定非営利活動法人 いしかわ生物多様性ネットワーク 上野 裕介	50万円 石川県	能登半島における市民参加型の生物多様性モニタリング 石川県能登半島は、日本の伝統的景観である「里山里海」が残る地域であり、希少生物や豊かな生物相が確認されている。一方で、昨年の能登半島地震・豪雨をうけ、急速に人口減少や耕作放棄が進んでいる。また沿岸部では、最大4mにもおよぶ海岸隆起が見られる。これらは、里山里海の生物に多大な影響を与えつつあるであろう。しかし、被災地であり人口減少も進む能登では、生物多様性をモニタリングする余裕がなく、里山里海の変化が見過され、劣化が進んでしまうかもしれない。そこで、自然環境保全に関心のある個人・団体など一般の参加を得て、自然環境や生物多様性の調査・教育研究・保全及び各主体の連携推進に関する活動を行う。
	京都冠島調査研究会 須川 恒	33.1万円 京都府	国指定天然記念物オオミズナギドリ繁殖地冠島での調査研究者の生活環境、情報発信並びに啓発活動の改善と向上 ・国指定天然記念物オオミズナギドリ繁殖地冠島に生息するオオミズナギドリ及びその生息を支える冠島の自然環境並びにその属島である沓島の保護保全 ・国指定天然記念物であり、オオミズナギドリの生息数が世界第二の生息数となっている冠島についての啓発活動と情報発信
	屋久島町エコツーリズム推進協議会 荒木 耕治	50万円 鹿児島県	永田浜ラムサール条約登録20周年記念イベントの実施 世界自然遺産である屋久島の北西部に位置する永田浜（いなか浜・前浜・四ツ瀬浜の3つの浜の総称）は、5月～7月にかけて延べ3000頭のアカウミガメの上陸があり、北大西洋最大のアカウミガメの繁殖地になっていることから2005年にラムサール条約湿地として登録され、団体や行政等によってウミガメの上陸・産卵・ふ化調査、ウミガメ観察会などの啓発活動、海岸清掃等の環境保全活動などが継続的に行われている。 本年は条約登録から20年に当たる年であり、20年間の取組を振り返るとともに、今後もウミガメと永田浜の環境保全を多様な主体と進めるための契機とするため、シンポジウム等の各イベントを実施することを目的とする。

研究の部	高田 隼人	50万円	東京都に生息するニホンカモシカの分布構造の決定機構
	東京都		ニホンカモシカ(以下、カモシカ)は森林生態系を代表する日本固有の大型草食獣であり、その生息環境の保全是国内の緑と水に恵まれた良好な自然環境の保全及び創出に資する。近年、カモシカの個体数は全国的に減少傾向にあり、その分布の中心は奥山から市街地付近の低山にシフトしている。個体数や分布変化の原因としてニホンジカ(以下、シカ)との種間競争の可能性が指摘されているものの、このことを科学的に証明した研究はない。そこで本研究は、東京都に生息するカモシカ個体群を対象に奥山から市街地近郊までの個体群密度や分布、それらに与えるシカやその他の環境要因を検討し、カモシカの分布構造の決定機構を解明することを目的とする。
	永野 真理子	49.6万円	プランクトンから探る水田ビオトープの生物多様性
	京都府		生物のすみかを奪う土地の改変は、生物多様性減少の主要な要因とされており、わが国では特に農地の放棄が深刻化している。そのため農林水産省は、水田において耕作放棄後も湛水を継続することで、生物のすみかを確保するよう推進している。このビオトープ化によって、どのように生物多様性を維持することができるかについてのメカニズムの理解は、未解明のままである。そこで本研究は、水田に生息するプランクトンに着目して、生物多様性維持におけるプランクトンの寄与について明らかにする。両生類や昆虫などの大型生物の餌となる動物プランクトンが、放棄前または周辺の運用水田と比較してどのように変化するのかを確認する。
	井田 秀行	50万円	ブナ林の断片化がブナの種子生産とその年次変動に及ぼす影響の解明
	長野県		ブナ林は日本の冷温帯に広く分布し、豊凶を伴う種子生産が森林生態系の維持に重要な役割を果たしている。しかし、戦後の拡大造林や土地利用変化により断片化が進み、受粉効率の低下や健全種子の減少が懸念され、生態系や生物多様性への影響は不明である。本研究では、長野県内の異なる面積を持つブナ林7地点の20年以上のモニタリングデータを用いて、断片化が種子生産に与える影響を検証する。2025年に実施する林分構造調査と既存の種子トラップ・環境データを用いて、健全種子の変動や不健全種子の要因を分析するとともに、標高・気温・積雪量・林分面積・ブナの胸高断面積の影響を明らかにする。
	きょうと生物多様性センター	50万円	ミズスマシはなぜ、希少種となったのか？その要因と保全方法の検討
	湯本 貴和	京都府	ゲンゴロウやガムシ、ミズスマシなどの水生昆虫は、水圏環境の良好さを示す指標種だが、いまや全国で希少種となっている。一方で、1960-1970年代に幼少・青年期を過ごした人たちは昔はどこにでもいた普通種であると話す、「いつ」「どこで」確認したかという詳細な記録が存在せず、特にミズスマシ属は標本の数も少ない。そのため、減少の要因を解析するための基礎的情報がない上、生態についても不明なところが多い。本研究は、聞き取りにより生息やその環境に関する情報を収集しながら、現在京都府内唯一である生息場所での定点調査と京都府内の生息状況調査を行い、本種の保全についての具体的な手法を探索することを目的とする。
	夏川 遼生	50万円	絶滅危惧種イヌワシの繁殖成功を促進する森林施業法の確立
	新潟県		イヌワシは山地の森林に生息する大型猛禽類である。本種の個体数は繁殖成功率の低下によって急減している。本種は上空から地上の獲物を狩る捕食者であるため、低い樹冠疎密度(単位面積あたりの地表に対する樹冠の割合)が彼らの採食を支援し、最終的に繁殖成功を促進すると予想される。本研究では、イヌワシの繁殖個体数が国内最多である新潟県にて、繁殖成否と樹冠疎密度の関係性を解明し、繁殖成功に資する森林施業法を提言する。頂点捕食者である本種は高い生物多様性の指標であるため(Natsukawa & Sergio 2022, Ecology Letters)、彼らの保全を意図した森林施業は他種にとっても有益である。
	助成総額	477.8万円	